

沖縄ピースツアーの効果と意義：

テキストマイニングを用いて

杉田明宏・いとうたけひこ

1. 問題

大東文化大学文学部教育学科杉田ゼミナール（以下、杉田ゼミと略記）は、学部3年生・4年生に開講されている学科必修の演習科目の一つである。巻末付録Aのゼミ募集要項（大東文化大学文学部教育学科演習問題委員会（編），2010）に示したように、筆者（杉田）が開講するゼミは「平和の学びを創る」と題して、人間の心身の発達に対する阻害条件を減少させ、促進条件を増進するための多様な学びのあり方を追究している。近年は2学年合わせて16人前後が履修している。

ゼミの学習活動は、年間を通じた平和学習プログラムとなっており、前期に平和学の基礎について、ガルトゥング平和学を理論的な柱として学習し、後期は、学年末に実施する「ピースツアー」という平和学習旅行の事前学習を兼ねて、学習対象地の平和問題を内容的な柱とした学習を行っている。その過程で、ワークショップ型の授業、関東圏の戦争遺跡へのフィールドワーク、紙芝居等の学習教材作成、地域の平和イベントへの参画等、多様なスタイルの学びを経験しながら、平和学習を組織するスキルを獲得することも目指す。

以上のような学習の総まとめとして、毎年、年度末に「ピースツアー」と称する平和学習旅行を実施している。対象地は、ほとんどが沖縄であるが、原爆・核問題学習のために広島ツアーも過去に2回実施している。対象地として沖縄を重視している理由は、沖縄戦と米軍基地問題を中心に戦争－平和の問題が日本で最も集約的に現れている空間であり、戦争と暴力について現在進行形の問題としてリアルに学ぶことができる場所であるからである。また同時に、生命を重んじ平和を求める人々による非暴力的・持続的活動に接することができるからでもある。

さて、本研究は、2011年2月13日～17日（4泊5日）に実施された2010年度の沖縄ピースツアーを対象としている。ツアーの概要は表1の通りであった。

ツアーの構成要素は、沖縄戦および米軍基地問題に関する全体学習が3日、平和に限らず、自然・文化・歴史の多様なテーマを少人数単位の自主企画によって学ぶグループ学習が1日、学習の枠を外した自由行動が1日である。

2010年度の内容的な特徴は、元ひめゆり学徒の与那覇百子さんの体験を聴き、平和のための埼玉の戦争展（以下、戦争展）の展示パネルとしてまとめた経緯があるため、ひめゆり学徒の足跡をたどることを重視したコースを設定した。座間味島では集団死を生きのびた体験者の証言を聴き、関連する島内の戦跡を巡って、実相をリアルに認識することを目指した。米軍基地問題では、普天間・辺野古問題の最新状況や困難・展望を各現場におい

て関係者から聴き取ることを目的とした。また、ここ 10 年ほど継続してきた沖縄で学ぶ学生との交流については、昨年度から重視している対等な関係づくりを発展させ、ガイドプランを共同で作成するグループワークを試みた。

表 1 2010 年度 杉田ゼミ沖縄ピースツアーの概要

2010 年後期 2011 年	『沖縄戦新聞』(琉球新報社刊)等により沖縄戦に関する事前学習
2 月 11 日	事前学習：実際のツアーコースに沿った学習スポット毎に担当者を決めて集中学習を行った後、事前テストを実施した。
2 月 13 日	ツアー第 1 日：南部戦跡フィールドワーク。琉球大学学生平和ガイドメンバーの案内により、アブチラガマ→ひめゆりの塔&ひめゆり平和祈念資料館→荒崎海岸→沖縄県平和祈念資料館→平和の礎を巡り、学習した。
2 月 14 日	ツアー第 2 日：座間味島フィールドワーク。宮里哲夫さんの証言により座間味島での「集団自決」を学習した。その後、翌日にかけて座間味区長宮里芳和さんのガイドにより、座間味島での戦闘・「集団自決」の現場を歩く島内フィールドワークを実施した。
2 月 15 日	ツアー第 3 日：米軍基地フィールドワークとして、琉球大学学生平和ガイドの会と沖縄国際大学スマイライフのメンバーの案内により、嘉数高台で普天間基地問題を学習。その後、琉球大学を会場にして、両団体に沖縄キリスト教学院大学 One Love のメンバーを加え、4 大学で学生交流会を実施。各団体からの活動紹介の後、普天間基地を修学旅行生に案内するガイドプランを小グループに分かれて作成し、交流した。
2 月 16 日	ツアー第 4 日：グループ活動日。小グループに別れて自主的に計画を立て沖縄の自然、文化等を体験した。
2 月 17 日	ツアー第 5 日：出発時間まで自由行動。空港で搭乗前に事後テストを実施した。
3 月中旬	報告書用の総括的感想文をメールで提出させた。

ところで、この沖縄ピースツアーの取り組みの意義は、次の 4 点に整理される。

第 1 に、参加者である学生が、アイデンティティー形成期の青年として、歴史的・社会的・自然的・文化的学習要素を豊富に含む沖縄社会における現実の社会的相互作用のプロセスを観察・学習することを通して、社会の中で生きていく自分の役割を考えることである。これは青年期教育、もしくは青年心理学実践、としての意義である。

第 2 に、小学校の教職員免許状を取得する教育学科の学生が、近い将来に教壇に立つ者として、次世代の子どもたちの中に平和への希望を育むための教育方法を体験的に学習することである。これは教師教育、もしくは平和教育実践としての意義である。

第3に、主体的な平和の担い手たる市民となるために、暴力と平和の問題に関わり続けるモチベーションとスキルを高めることである。これは市民教育、もしくは平和心理学実践としての意義といえよう。

第4に、ゼミの1年間の平和学習の最後のプログラムとして、「平和とは?」「平和を学ぶとは?」「平和を創るとはいかなることか?」という根本的な問いについて、具体的な社会現実を通して総合的に考え、自分なりの総括を行うことである。これは大学におけるゼミ教育実践としての意義である。

以上の意義を踏まえて、本ツアーの参加者は、暴力と平和の現場としての沖縄に身を置き、その状況を五感で感じながら、そこに関わる人々の活動や証言を通して、暴力のリアリティーと平和のロールモデル（杉田, 2001, 2006）を獲得し、それぞれの心の中に「平和の砦を築く」（UNESCO, 1945）ことが期待されている。

そこで、本ツアーにおいては以下のような柱で獲得目標が想定されている。

第1に、沖縄現地において、沖縄戦や基地問題の現場や、それに関わりを持つ人々と交流する経験を通じて、具体的事実を詳細に知り、より実感を持って問題を受け止めるようになることである。

第2に、現地でのさまざまな体験を通じて、それまで気づかなかった新たな問題・新たな課題を発見することである。

第3に、現地で問題に取り組む人々と交流し、活動を共にすることを通じて、今後も平和の問題に関わり続けようというモチベーションが高められ、自らの次の活動がエンカレッジされることである。

ところで、杉田ゼミの沖縄ピースツアーは2011年で13回を数えたが、このような獲得目標が、参加学生の一人一人において実際どのように達成されたかという点について、質的・量的データを通じて検証する研究的作業は実施されてこなかった。しかし、この作業は、ツアープログラムを改善し教育効果を高める上で、また、平和学習の有効な方法を開発する上で重要な意義を有すると考えられる。この効果を検証するためには、学生自身が本ツアーについて事前にどのような期待をいただき、現地でどのようなことを感じ・考えたか、それを事後に振り返ってどのようなことを自らの中に残したかを確認するという方法が有効であると考えられる。

教育実践の効果を検証する方法論については、いとう・杉田・井上(2010)が、2009年度の教員免許更新講習として杉田が大東文化大学において実施したガルトゥング平和学に基づく平和教育のワークショップ形式の教育プログラムを検証したものを参考にすることができる。これは、講習終了後に参加者の自由記述形式の提出物をテキストマイニングの手法を用いて分析するものであった。その結果、テキストマイニングによる分析方法が、実践の効果を評価する上で一定の有効性を持つことが明らかにされた。また同時に、焦点となる実践の事後テストだけでなく、事前と事後の記述の比較を行うことによって有効性の効果が明確になるであろうことが指摘された。

そこで本研究では、沖縄ピースツアーの実践の効果を検証するために、事前と事後に実施した質問紙調査、及び総括的感想文の内容を分析するという方法をとることにした。

2. 目的

本研究の目的は、ツアーの事前・事後に尋ねた質問項目への回答とその変化、及び約一ヶ月後にツアーを改めて振り返って書かれた総括的感想文の内容の特徴を分析することにより、本ツアーの効果を評価し、その平和学習の方法としての意義を考察することにある。

より具体的には、以下の8つの課題を作業仮説としてそれらが達成できたかを検証することが本研究の主要な作業となる。これらの作業仮説は、前述の沖縄ピースツアーの獲得目標に対応し、それを評価する指標となるものとして設定されている。

獲得目標の1に対応するのは以下の二つである。

仮説1：ツアーへの参加により、記述量（単語数）が増加し、とりわけ人名・地名等の固有名詞が増加するであろう。

これは、現地において、学習活動や自由行動場面で体験者や住民・学生と接しながら、具体的で詳細な話を聴き、多様な経験をする事を通じて、具体的な記述が増えていくことを想定している。

仮説2：ツアーへの参加により、感情を表現する言葉が増加するであろう。

これは、沖縄戦や基地問題の現場の状況、体験者の証言・衝撃的事実や状況、あるいは積極的な活動や心情に触れることによって、悲しみ・恐怖・怒りといった否定的感情が体験されることを指している。Adams(1986,1995)は、平和活動のとりわけ初期において、不正義に対する「怒り」の感情の重要性を述べている。

次に、獲得目標の2に対応するのは以下の二つである。

仮説3：ツアーへの参加により、問題を見る視点が多角的・総合的になるであろう。

これは、沖縄の各地を実際に歩くことによって、事前学習で中心としている直接的暴力／平和の問題のみならず、文化・歴史・自然等との関連を実感し、随所での住民との触れ合いが媒介となって、多角的・総合的に沖縄の問題を考えられるようになることが期待されているということである。

仮説4：ツアーへの参加により、事前には知り得なかった、あるいは予想していなかった問題・課題・視点への気づきが起こるであろう。

これは、事前学習で得た知識・視点には無かった、あるいはそれと矛盾するような証言・事実・ものの見方に出会い、驚きや新たな問題意識が生じるということである。

獲得目標の3に対応するのは以下の四つである。

仮説5：ツアーへの参加により、沖縄への親近性が増加するであろう。

これは、沖縄のユニークな歴史・文化・自然や沖縄で生活する人々に接することを通じて、より好意的で身近な存在になることが期待されるということである。

仮説6：ツアーへの参加により、沖縄の人々とのつながりをより意識するようになるであろう。

これは、現地の人々との交流を通じて、例えば「沖縄の人たち」、「戦争体験者」という総称でなく、「○○さん」といった固有名詞での認識や、それらの具体的個人を通じた戦争・平和認識が取得されることにより、人とのむすびつきが強く深くなることである。

表2 沖縄ピースツアーの獲得目標と対応する作業仮説

■沖縄ピースツアー獲得目標	■対応する作業仮説（教育的課題）
[1] 沖縄現地において、沖縄戦や基地問題の現場や、それに関わりを持つ人々と交流する経験を通じて、具体的事実を詳細に知り、より実感を持って問題を受け止めるようになることである。	仮説1：ツアーへの参加により、記述量（単語数）が増加し、とりわけ人名・地名等の固有名詞が増加するであろう。 仮説2：ツアーへの参加により、感情を表現する言葉が増加するであろう。
[2] 現地でのさまざまな体験を通じて、それまで気づかなかった新たな問題・新たな課題を発見することである。	仮説3：ツアーへの参加により、問題を見る視点が多角的・総合的になるであろう。 仮説4：ツアーへの参加により、事前には知り得なかった、あるいは予想していなかった問題・課題・視点への気づきが起こるであろう。
[3] 現地で問題に取り組む人々と交流し、活動を共にすることを通じて、今後も平和の問題に関わり続けようというモチベーションが高められ、自らの次の活動がエンカレッジされることである。	仮説5：ツアーへの参加により、沖縄への親近性が増加するであろう。 仮説6：ツアーへの参加により、沖縄の人々とのつながりをより意識するようになるであろう。 仮説7：ツアーへの参加により、平和のロールモデルが見いだされるであろう。 仮説8：ツアーへの参加により、平和の問題・沖縄の問題に関わっていこうとする主体性やモチベーションが高められるであろう。

仮説7：ツアーへの参加により、平和のロールモデルが見いだされるであろう。

暴力への向き合い方、その克服の仕方、平和づくりのスキルの形成を沖縄ピースツアーでは重視している。とりわけ、同世代の沖縄ガイドの学生たちや基地に抵抗する沖縄の人々の積極的な思想や活動に触れて、自分もそのようになりたい、あるいは少なくとも自分ができる役割とは何だろうか、自分に何ができるのだろうか等を考えるきっかけになるように、動機づけられることである。すなわち、平和のロールモデル（杉田, 2001, 2006）を自己の中に形成することである。

仮説8：ツアーへの参加により、平和の問題・沖縄の問題に関わっていこうとする主体性やモチベーションが高められるであろう。

これは、さまざまな現場で活動し、伝えようとしている当事者を媒介にして問題の深刻さに触れることによって、自分自身が沖縄のことを他者に伝える側に立つことを想定したり、その役割を担おうとする意欲・意志が形成されたりすることを指している。

以上の獲得目標と仮説との関連をまとめたものを表2に示す。

以上の8つの作業仮説を、テキストマイニングの量的分析と原文参照による質的分析を組み合わせたミックス法（Creswell, 2007, 2010）より検証し、考察する。

3. 方法

研究対象者：2010 年度の杉田ゼミ沖縄ピースツアーに参加した 13 人。内訳は、男性 10 人、女性 3 人である。学年別では、4 年生 10 人、3 年生 3 人であった。また、ゼミのツアーとして沖縄を訪れた経験では、2 回目が 9 人（全て 4 年生）、初めてが 4 人（4 年生 1 人、3 年生 3 人）であった。

質問紙：自由記述形式の質問紙調査によって、事前学習日である 2 月 11 日の学習後に事前テストを行い、ツアー最終日の飛行機搭乗前に那覇空港ロビーにて事後テストを実施した。さらに、帰京後の約一か月後を締切として、事後の総括的な感想文の提出を求めた。この時期は春休み中で質問紙の回収が困難であったため、基本的にメールでの提出とした。なお、事前テストを付録 B、事後テストを付録 C として巻末に記載した。事後の総括的な感想文は、ツアー全体を振り返り、考えたこと感じたことを書いてください、という指示を行った。

分析方法：全員の分（13 名）の事前テスト、事後テスト、および事後の総括的な感想文の文章をテキスト化し、1 名分のデータを 1 行としたタブ区切りデータとして保存した。入力したデータを Text Mining Studio Ver. 3 へ投入し、テキストマイニングを用いて分析を行った。倫理的配慮として個人の情報が問題ではなく、また氏名を公開しないことを予め対象者に伝えた。

4. 結果

まず初めに、テキストマイニングにおけるテキスト基本統計量を示す。全体として、自由記述式の問いのうち計 17 項目（事前テスト分が 7 項目、事後テスト分が 9 項目、総括的な感想文を 1 項目）にツアー参加学生 13 人全員が回答している。各回答のテキスト平均文字数は 61.4 文字であった。総文数は 703 文であり、一文あたりの平均文字数は 20.5 文字である。内容語について、のべ単語数は 5,701 単語、単語種別数は 1,698 語で、タイプ・トークン比（金, 2009）は .297 であった。

以下、ツアー前の 2 月 11 日に実施した事前テストの回答、ツアー日程を終えた最終日の 2 月 17 日に実施した事後テストの回答、さらに、ツアー後、約 1 月以内に報告書用に提出されたツアー全体についての各自の自由記述の感想文について、出現単語頻度（単語頻度分析）を中心に分析した結果を示す。なお、以下の単語頻度分析において記されている単語頻度は、用いられた単語の総数の頻度ではなく、単語が行内に存在するか(1)、否か(0)を示している。これは前述の通り、1 名分の全自由記述データを 1 行として入力したことに起因しており、つまりは単語頻度における回数は、その単語を使用した人数ということになる。

（1）南部戦跡フィールドワークへの事前の期待と事後の印象

ツアー第 1 日目の南部戦跡フィールドワークについて、事前に期待すること、事後に印象に残ったことを尋ねた自由記述において、2 回以上出現した、すなわち 2 人以上が記述

した単語（名詞）とその頻度（人数）を示したものが表3の単語頻度一覧である。

表3を見ると、2個以上、すなわち2人以上の記述に登場する単語種別数は、事前テストの15語から、事後においては12語に減少した。事前では「沖縄」の頻度（すなわち「沖縄」の語を記述した参加学生の人数。以下同様）が最も多く、「アブチラガマ」「戦跡」「与那覇百子さん」がそれに続いていた。事後には、「ひめゆり」「実際」及び「壕」が多く見られた。「ひめゆり」については、それとは別に「ひめゆり学徒隊」が2個カウントされている。これらは「ひめゆり」を代表語とする類義語とみなすことができ(6回)、南部戦跡フィールドワーク後において学生に最も多く記述されていた名詞である。また、「実際」とは別に、「当時」が2回カウントされているが、原文参照によると「当時実際に使用されていた物」のように同一人物の同一文にセットで登場していた。同様に、別々に2回ずつカウントされている「実感」と「悲惨」も、「悲惨さを実感した」というセットで使われていることがわかった。

ツアー第1日目については、事前には「アブチラガマ」「与那覇百子さん」などの具体的な単語が意識されたのに対し、事後の印象では「ひめゆり」「壕」という一見抽象的な単語になっている。しかし、原文を参照すると、現地では、事前学習の際に交流していた具体的個人（与那覇さん）以外のさまざまな「ひめゆり学徒」たちの存在に気づき、さらに沖縄戦が「ひめゆりだけと誤解してしまっている」こと、「ひめゆりはほんの一部の出来事」であることに気づかされた結果が現れているのであって、認識が相対化・一般化され、むしろ発展していることが読み取れるのである。

表3 南部戦跡フィールドワークへの事前の期待と事後の印象

事前の期待			事後の印象		
単語	品詞	頻度	単語	品詞	頻度
沖縄	名詞	5	ひめゆり	名詞	4
アブチラガマ	名詞	3	実際	名詞	4
戦跡	名詞	3	壕	名詞	3
与那覇百子さん	名詞	3	ひめゆり学徒隊	名詞	2
ガマ	名詞	2	一番	名詞	2
映像	名詞	2	印象	名詞	2
気持ち	名詞	2	沖縄	名詞	2
実際	名詞	2	実感	名詞	2
生	名詞	2	戦争	名詞	2
戦争	名詞	2	想像	名詞	2
地上戦	名詞	2	当時	名詞	2
当時	名詞	2	悲惨	名詞	2
南風原陸軍病院	名詞	2			
雰囲気	名詞	2			
歴史	名詞	2			

(2) 座間味島フィールドワークへの事前の期待と事後の印象

ツアー第2日目の座間味島フィールドワークについて、事前・事後の質問紙の自由記述回答中、2回以上登場した単語（名詞）とその頻度（人数）を示したものが表4の単語頻度一覧である。

表 4 を見ると、単語種別総数は事前 13 語から事後 17 語へと増加した。内容を見ると、事前では「集団自決」が 4 回、「事実」「他」「話」がそれぞれ 3 回ずつカウントされている。事後では「話」「当時」「印象」「宮里哲夫さん」「島」が上位に来ていた。ただし「話」と「証言」、および「島」と「座間味」と「座間味島」は、それぞれ同義であることを考慮すると、前者「話」は 8 回（合計 9 回であるが、そのうちの 1 回は同一人物が両方の単語を使っているのを除外した）、後者「島」は 8 回とカウントできる。また、事後においては話者である宮里哲夫さん、宮里芳和さんの名前が学生の記述に登場していることがわかった。

頻度が最も多かった「話」について原文を参照すると、現地で証言を伺った「宮里哲夫さん」の「集団自決」の「当時」の話、および、島内を案内していただいた「宮里芳和さん」の解説を指しており、それが強く「印象」に残ったとしていた。したがって、これらはセットとみなすことができる。

第 2 日目の座間味島については、事前には「集団自決」の「事実」を知りたいという期待にとどまっていたものが、事後においては、「宮里哲夫さん」の証言を通じて、「普通の生活をしていた人々の生活の話」や「座間味の人が疎開できなかった」話、「昔の人の戦争についての認識」の話など、詳細で具体的な数々のエピソードが強い印象を残したことがわかる。

表 4 座間味島フィールドワークへの事前の期待と事後の印象

事前の期待			事後の印象		
単語	品詞	頻度	単語	品詞	頻度
集団自決	名詞	4	話	名詞	6
事実	名詞	3	当時	名詞	5
他	名詞	3	印象	名詞	4
話	名詞	3	宮里哲夫さん	名詞	4
学習	名詞	2	島	名詞	4
宮里哲夫さん	名詞	2	集団自決	名詞	3
現場	名詞	2	証言	名詞	3
座間味	名詞	2	人	名詞	3
事前学習	名詞	2	戦争	名詞	3
自然	名詞	2	フィールドワーク	名詞	2
証言	名詞	2	宮里芳和さん	名詞	2
渡嘉敷	名詞	2	座間味	名詞	2
島	名詞	2	座間味島	名詞	2
			妻	名詞	2
			住民	名詞	2
			体験	名詞	2
			米軍	名詞	2

(3) 米軍基地フィールドワークへの事前の期待と事後の印象

ツアー第 3 日目の米軍基地フィールドワークに関して、事前・事後の質問紙の自由記述回答中、2 回以上登場した単語（名詞）とその頻度（人数）を示したものが表 5 の単語頻

度一覧である。

表5を見ると、2回以上の単語種別総数は事前13語、事後11語であり、2語減少した。事前では「基地」が6回、「基地問題」「生活」「米軍基地」「米兵」「問題」が3回であった。「基地」と「米軍基地」については、同義の類義語として考えると最も頻度が多い。同様に、「問題」と「基地問題」についても同義であると位置づけると、事前の期待では「基地」が9回であり、「基地問題」が6回であることがわかる。事後は、「基地」が6回、「人々」が3回であった。事前には無かった「嘉数」「気持ち」「考え」の単語がならぶ。

事前学習において基地被害について学習したこともあってか、事前テストでも「基地」が住民の「生活」に与える影響についての関心が高かったが、事後テストでは、「地元の人々の気持ちがとても良く伝わり、考え方が変わった」という記述に典型的に現れているように、嘉数でのフィールドワークにおいて、眼前に広大な基地を見ながら、騒音に悩まされる住民・学生の生活の話を聴き、また、交流会で基地案内のガイドプランを地元の学生と話し合うことを通じて、基地問題のリアリティーが増し感情移入するようになったことが推測される。

表5 米軍基地フィールドワークへの事前の期待と事後の印象

事前の期待			事後の印象		
単語	品詞	頻度	単語	品詞	頻度
基地	名詞	6	基地	名詞	6
基地問題	名詞	3	人々	名詞	3
生活	名詞	3	沖縄	名詞	2
米軍基地	名詞	3	嘉数	名詞	2
米兵	名詞	3	気持ち	名詞	2
問題	名詞	3	考える	名詞	2
影響	名詞	2	今	名詞	2
去年	名詞	2	今回	名詞	2
現地	名詞	2	塔	名詞	2
今	名詞	2	普天間	名詞	2
住民	名詞	2	普天間基地	名詞	2
存在	名詞	2			
様子	名詞	2			

(4) 沖縄の大学生との交流への事前の期待と事後の印象

ツアー第3日目、米軍基地フィールドワーク後に実施された沖縄の大学の学生たちとの交流会に関して、事前・事後の質問紙の自由記述回答中、2回以上登場した単語（名詞）とその頻度（人数）を示したものが表6の単語頻度一覧である。

表6を見ると、2回以上の単語種別総数は事前9語、事後10語であり、1語増加した。事前では「沖縄」が5回、「学生」「考える」が4回、「違う」「人」「問題」がそれぞれ3回出現していた。事後は、「学生」が5回、「ガイド」「沖縄」「平和」がそれぞれ3回であった。事前には見られなかった「ガイド」「平和」「意見」「活動」「身近」「証明」が事後に出現している。

原文を参照すると、事前の期待では「学生と交流する」ことによって「沖縄に住んでいる学生の考えと、住んでいない自分たちの考えの違い」を知ることに関心が強いようであるが、交流後の印象としては、「身近で学び、生活している沖縄の学生には熱いものを感じた」、「ガイドの腕は本物だ」と差を実感しつつ、「どんどん意見が飛び交い」「お互いに意見を尊重し合い」という交流の中で「関東の学生と何も変わらない」「仲良くなった」と親近感を高めたことがわかった。

(5) グループ活動への事前の期待と事後の印象

ツアー第4日目のグループ別自主活動に関して、事前・事後の質問紙の自由記述回答中、2回以上登場した単語（名詞）とその頻度（人数）を示したものが表7の単語頻度一覧である。

表7によれば、2回以上の単語種別総数は事前7語に対し、事後は11語に増加した。事前では「沖縄」が9回、次いで「文化」が4回、「自然」が3回見られた。事後は、「沖縄」が5回、「自然」が4回であるが、事前には見られなかった「基地問題」「現場」「現地」「住民」「反対運動」といった単語が出現した。「現場」および「反対運動」の原文参照によると「反対運動の現場」のようにセットになっている。

沖縄に対する事前の期待は、沖縄の「文化」「自然」に関するものが多く、事後にも「自然」が上位に挙げられていた。しかし、「自然」についても「想像を越える」「偉大さを感じたりする」というように印象を強くするだけでなく、それが「住民の手によって大切に守られている」「今まさに無くなろうとしている」というように人間との関わり方が意識されていることがわかる。また、辺野古や高江の基地建設反対運動に出会った学生たちは「運動の熱気、住民の怒りが伝わってきた」と、リアルな現場の姿を衝撃的に受け止めていた。

表6 沖縄の大学生との交流への
事前の期待と事後の印象

事前の期待			事後の印象		
単語	品詞	頻度	単語	品詞	頻度
沖縄	名詞	5	学生	名詞	5
学生	名詞	4	ガイド	名詞	3
考える	名詞	4	沖縄	名詞	3
違う	名詞	3	平和	名詞	3
人	名詞	3	意見	名詞	2
問題	名詞	3	活動	名詞	2
現地	名詞	2	考える	名詞	2
交流	名詞	2	身近	名詞	2
生活	名詞	2	人	名詞	2
			証明	名詞	2

表7 グループ活動への
事前の期待と事後の印象

事前の期待			事後の印象		
単語	品詞	頻度	単語	品詞	頻度
沖縄	名詞	9	沖縄	名詞	5
文化	名詞	4	自然	名詞	4
自然	名詞	3	基地問題	名詞	2
久高島	名詞	2	現場	名詞	2
神の島	名詞	2	現地	名詞	2
神秘	名詞	2	実感	名詞	2
戦争	名詞	2	住民	名詞	2
			戦争	名詞	2
			反対運動	名詞	2
			風景	名詞	2
			歴史	名詞	2

(6) ツアー全体についての事前の期待と事後の印象

ツアー全体に関しての事前の期待と事後の印象の自由記述回答中、2 回以上登場した単語（名詞）とその頻度（人数）を示したものが表 8 の単語頻度一覧である。

表 8 によれば、2 回以上の単語種別総数は事前 8 語に対し、事後は 13 語に増加した。事前では「沖縄」「学習」「去年」「考える」がそれぞれ 3 回見られた。ここでの「考える」とは、原文を見ると、いずれも自分の「考え」を深めたい・まとめたいということである。

事後は、「沖縄」「戦争」が 4 回、「実際」「人」が 3 回であった。事前には見られなかった「実際」「人」「ゼミ」「フィールドワーク」「交流」「今」「今回」「思う」「大切」「目」といった単語が出現した。ここで「思う」の原文を参照すると、沖縄の人の「想い」のことであり、「目」は実際に自分の目で見ることである。

事前・事後ともにトップの「沖縄」でも、事前では「沖縄を感じたい」というように対象としての沖縄であったが、事後は「自分と今の沖縄の方々、昔の方々を重ね合わせて」「活動を沖縄の人たちだけのものとはせず、私たちでも伝えていけるようにしたい」というように自我関与が高まっている。それは「実際に現場に行ってみると」「実際に目で見ると」という書き方からわかるように、現場に身を置き、現地の「人」と接するという経験に基づいていると考えられる。

表 8 ツアー全体についての事前の期待と事後の印象

事前の期待			事後の印象		
単語	品詞	頻度	単語	品詞	頻度
沖縄	名詞	3	沖縄	名詞	4
学習	名詞	3	戦争	名詞	4
去年	名詞	3	実際	名詞	3
考える	名詞	3	人	名詞	3
意識	名詞	2	ゼミ	名詞	2
沖縄戦	名詞	2	フィールドワーク	名詞	2
出来事	名詞	2	学習	名詞	2
目	名詞	2	交流	名詞	2
			今	名詞	2
			今回	名詞	2
			思う	名詞	2
			大切	名詞	2
			目	名詞	2

(7) 自分にとっての沖縄の意味の事前・事後の変化

沖縄が「自分にとってどのようなところか」という問いを事前・事後の質問紙で尋ねたが、その自由記述回答中、2 回以上登場した単語（名詞）とその頻度（人数）を示したものが表 9 の単語頻度一覧である。

表 9 を見ると、単語種別総数は事前の 7 語から事後は 13 語に増加した。事前では、「場所」4 回、「戦争」が 3 回などであったが、事後は、「沖縄」6 回、「場所」4 回であった。事後では事前には見られなかった、「これから」「基地」「身近」「人」「存在」「大切」「日本」

「文化」が新たに出現している。「場所」について原文を参照すると、事前にはいずれも「戦争」や「普天間」という問題と結び付けられているが、事後では、「私たちが」「自分の大切な」「沖縄の人たちと共に」のように自分に引きつける形で記されている。また事後に現れた「存在」も、原文を見ると「身近な」「遠くない」とセットであり、自らに引きつけて感じようとしていることが読み取れる。

(8) 沖縄で出会った「印象に残った人」

沖縄ツアーで「印象に残った人」について事後に尋ねた自由記述において、2 回以上登場した単語（名詞）とその頻度（人数）を示したものが表 10 の単語頻度一覧である。

表 10 を見ると、「北上田源さん」が 5 人、「会沢芽美さん」と「宮里哲夫さん」がともに 4 人に記述されていた。北上田源さんは、元琉球大学学生ガイドの会のメンバーで、今回の南部戦跡ガイドに加わっていただいた。会沢芽美さんは 1 泊した「うたごえペンションまーみなー」のオーナーで、歌と芝居で沖縄戦や基地の問題を表現し、沖縄内外に伝える活動を続けている女性である。宮里哲夫さんは、座間味島での「集団自決」の生き証人として、証言活動を続けている方であり、今回のツアーでも長時間にわたり当時の体験と想いを学生に伝えていただいた。

原文を参照していくと、最多の 5 人に取り上げられていた北上田さんについては、少し年上の同世代でありながら、豊富なガイド経験と研究に裏打ちされた知識・伝達スキル・問題意識によって強い刺激を与えており、「参考にしたい」「見習いたい」「学びたい」と述べられていた。まーみなーの会沢芽美さんに関しては、歌と一人芝居で表現する実演に接して、「インパクトがあった」「心を打たれた」「ひきこまれた」という記述が目立った。また、宮里哲夫さんについては、生々しい証言をじっくり聴いたことにより、「重み」「熱意と迫力を感じた」「胸に響いた」というように強い印象を与えていたことがわかる。

表 9 自分にとっての沖縄
の意味の事前・事後の変化

事前の期待			事後の印象		
単語	品詞	頻度	単語	品詞	頻度
場所	名詞	4	沖縄	名詞	6
戦争	名詞	3	場所	名詞	4
一つ	名詞	2	これから	名詞	2
一番	名詞	2	沖縄問題	名詞	2
沖縄	名詞	2	基地	名詞	2
今	名詞	2	身近	名詞	2
問題	名詞	2	人	名詞	2
			存在	名詞	2
			大切	名詞	2
			日本	名詞	2
			文化	名詞	2
			問題	名詞	2

表 10 沖縄で出会った
「印象に残った人」

単語	品詞	頻度
北上田源さん	名詞	5
会沢芽美さん	名詞	4
宮里哲夫さん	名詞	4
まーみなー	名詞	2
沖縄	名詞	2
歌	名詞	2
考える	名詞	2
参考	名詞	2
芝居	名詞	2
出会う	名詞	2
心	名詞	2
人	名詞	2
知識	名詞	2
伝える	名詞	2
表現	名詞	2
豊富	名詞	2
話	名詞	2

(9) 総括的感想

ツアー終了後約一ヶ月の期間で、ツアー全体を振り返って書いてもらった個々人の総括的感想文において出現した単語頻度総数（名詞）および頻度（人数）を分析したものが表11である。

単語頻度総数について見ると、「沖縄」「話」「宮里哲夫さん」「今回」「証言」「戦争」「ガイド」「人」「壕」「今」「座間味」「実際」が上位に挙げられている。原文を参照してみると、「話」と「証言」は、座間味島での宮里哲夫さん、ひめゆり学徒隊の与那覇百子さんといった体験者の証言、辺野古の座り込みの方からの説明、学生平和ガイドの解説などを指しており重なりのある言葉であることがわかる。またスポットとしては、初日に入った南風原第20号壕やアブチラガマの「壕」と、「座間味島」がとりわけ単語数、人数ともに頻度が高く、強い印象を残したことがわかる。

これらは、沖縄戦や米軍基地の現場に「実際」に足を運んで現地・現物から感じ取ることや、その問題に関わってきた現地の人々と交流し、それらの人々の話を通じて問題を認識することを重視した効果を現わすものと言えるだろう。

とりわけ、13人中10人が記述している「宮里哲夫さん」は、「座間味島」での生活と戦争と強制集団死等について、2時間半にわたって詳細に「証言」した。それは、原文によれば「今まで聞いてきたどの証言よりも残酷で悲しいものだった。自分の家族を殺さなければならなかった心理とはどういったものなのだろう。愛する我が子を殺さなければいけない母親の気持ちはどんなものだっただろうか。このことを思うと、どこに向ければよいかわからない怒りを感じ」たといった悲痛な体験内容であった。しかし、それだけでなく、「日本軍と民間人の関係は、最初は和やかな雰囲気だったようで意外だった」、兵隊に「憧れや尊敬の感情を抱く」ことが「不思議で仕方なかった」、「事前学習で学び、イメージしていたその島での住民と兵隊の関係性が違い、やはり現地へ行きその戦争体験者の話をきくと様々な発見とともに色々な物が見えてくると感じた」というように、新たな知識や疑問を生み出す話として、参加者たちの印象に残ったものであろう。

また、「ガイド」という単語の多くは、フィールドワークと「交流会」で接した琉球大学や沖縄国際大学の学生の活動を指している。原文では「ガイドすることの大変さを知り、それを自分と同じ年代の人たちがやっていることが純粋にすごいと感じた」、「ガイドの難しさを改めて感じた」、「沖縄学生ガイド」が「ガイドをしながら戦跡に触れている」、「話し方一つとっても惹き付けるものがあり（中略）私の目指すべきところであると感じた」等、大きな刺激を受けたことがわかる。

「実際」や「実感」は、リアリティーの表現として多用され、現地研修の効果を端的に示すキーワードともいえる。原文では「ひめゆり学徒隊の実際に通った道」、「戦争によって心に傷を負った人が実際に居るということを自分の目で見て」、「壕やガマの劣悪な環境も、騒音被害も話で聞くのと実際に見てくるのでは大きく違った」、「実際に生活してみなければ分からない」、あるいは、「日常生活から大変なのだと、話を聞いてあらためて実感しました」、「軍隊が民間人を守るための組織でない事を実感した」、「今と戦争時の感性の違いを考えさせられ、教育の大切さを実感した」、「沖縄のすごさを実感した」等のように、現地で体験した事柄の衝撃の強さや、事前に想像・予想したものとの一致やズレによ

る強い印象が記されている。

「言葉」とは、原文では「言葉にする」「言葉にできない」という動詞形であり、意味としては「表現する」「他者と共有する」「伝える」とことと類似している。例えば、「事実を過去のことで終わらせるのではなく伝えていかなければいけない」、「私たち世代が戦争の悲惨さや悲しみを伝えていくようになった時」、「伝えていく事がとても重要な使命」、「伝える力を自分達も勉強しなければならないと強く感じた」といった表現は、自分らが伝える側の立場に立つことを考え始めたことをうかがわせるものと言えよう。

表 11 ツアー終了後の総括的感想

単語頻度総数(8頻度以上)			人数(7人以上)					
単語	品詞	頻度	単語	品詞	頻度	単語	品詞	頻度
沖縄	名詞	51	知識	名詞	11	沖縄	名詞	12
話	名詞	31	言葉	名詞	10	話	名詞	11
戦争	名詞	25	1日	名詞	9	宮里哲夫さん	名詞	10
人	名詞	23	ピースツアー	名詞	9	今回	名詞	10
今回	名詞	22	合宿	名詞	9	証言	名詞	10
壕	名詞	18	自然	名詞	9	戦争	名詞	10
ガイド	名詞	17	表現	名詞	9	ガイド	名詞	9
宮里哲夫さん	名詞	16	ひめゆり学徒隊	名詞	8	人	名詞	9
証言	名詞	16	学生	名詞	8	壕	名詞	8
座間味島	名詞	15	基地問題	名詞	8	今	名詞	8
実際	名詞	15	思う	名詞	8	座間味島	名詞	8
去年	名詞	14	場所	名詞	8	実際	名詞	8
当時	名詞	14	状況	名詞	8	1日	名詞	7
学習	名詞	12	心	名詞	8	言葉	名詞	7
今	名詞	12	南風原陸軍病院	名詞	8	交流会	名詞	7
ゼミ	名詞	11	二度	名詞	8	実感	名詞	7
印象	名詞	11	平和	名詞	8	状況	名詞	7
基地	名詞	11	与那覇百子さん	名詞	8	心	名詞	7
交流会	名詞	11						

5. 考察

(1) 結果の要約：8つの作業仮説について

1) 仮説1の「ツアーへの参加により、記述量(単語数)が増加し、とりわけ人名・地名等の固有名詞が増加するであろう」という予測については、多くの項目で単語種別総数が増加し概ね支持されたとも言えるが、南部戦跡と米軍基地のフィールドワークに関しては減少しており、支持されなかった。また、質的問題として、固有名詞の増加が認められたのは、米軍基地の事後テストにおいて「沖縄」「嘉数」「普天間・普天間基地」が新たに複数の参加者に使われている程度であった。

中でも、南部戦跡について振り返った際の印象では、量的に減少し、質的に固有名詞が減少して仮説と正反対の結果となったように見える。しかし、この点についての評価は丁寧になされなければならないであろう。すなわち、「アブチラガマ」「与那覇百子さん」「南

風原陸軍病院」といった具体的な単語が事後では消え、「ひめゆり（学徒）」が出現しているのは、一見、具体性が失われたことを表しているようにも見える。しかし、結果(1)で指摘したように、これは現地での学習の結果として認識が相対化・一般化され、あるいは着眼点の変化し、むしろ認識としては発展していると解釈することも可能なのである。

このことは、認識の変化・深化を記述の量的な増減のみによって判断することは困難であり、質的な分析が必要とされるということを示唆しているとも言えよう。

2) 仮説2は「ツアーへの参加により、感情を表現する言葉が増加するであろう」というものであった。この点については、結果(1),(2)の分析で見たように、沖縄戦・集団自決の証言に接して複数の参加者が「悲惨」さを「実感」したことが検出される。このことは、原文に遡って見ると、「理不尽な被害に対して怒りがわいた」、「(集団自決の強要・誘導が)事実にもかかわらず伝わらないことのもどかしさも感じた」、「裁判についての強い口調」、「(歌や芝居で伝えている人がいる一方で、想いを)伝えられず心に怒りをしまっている人たちもたくさんいると思います」というように、より具体的に表現されていることがわかる。このことは特定の単語の頻度のみでは十分に検証されない部分である。

また、普天間などの米軍基地問題でも、基地の隣で暮らす学生・住民の話を聴き、地元の「人々」の「気持ち」が伝わり「考え」方が変わったり、「基地反対運動」の衝突場面に会って「想像以上にピリピリした空気で、迫力があつた」「運動の熱気、住民の怒りが伝わってきた」と衝撃を表現したりしている。

これらのことから感情的表現が増加するという仮説2は支持されたとと言えるであろう。

以上の仮説1, 2から、参加者は沖縄戦や基地問題の現場に触れ、そこに関わる人々の語りを通じて、歴史的事実を具体的に、詳細に知り、より実感を持って問題を受け止めるようになったと考えられる。

3) 仮説3の「ツアーへの参加により、問題を見る視点が多角的・総合的になるであろう」という予測は支持されたといえよう。

結果の(5)でも触れたように、グループ活動や自由行動で久高島や首里城、北部に行った参加者は、歴史・文化・自然に触れることによって、「自然が今まさになくなろうとしている」「そちら側から考えることができたのでよかった」「沖縄へのイメージが変わった」「沖縄の事をもっと楽しい面からも見る力を養えた」等、沖縄戦や米軍基地の暴力の問題をいったん離れ、沖縄の持つ魅力的な側面にも多く触れることによって、それら全体を通じて改めて戦争と基地の問題をとらえ直すことができるようになったと考えられる。

4) 仮説4「ツアーへの参加により、事前には知り得なかった、あるいは予想していなかった問題・課題・視点への気づきが起ころうであろう」という予測は支持された。

結果(9)で述べたように、「日本軍と民間人の関係は、最初は和やかな雰囲気だったように意外だった」、兵隊に「憧れや尊敬の感情を抱く」ことが「不思議で仕方なかった」「事前学習で学び、イメージしていたその島での住民と兵隊の関係性が違い、やはり現地へ行

きその戦争体験者の話をきくと様々な発見とともに色々な物が見えてくると感じた」という、意外性、違和感・疑問の生起、発見が経験されている。「ガマを出入りする者は殺す、家族を殺す、手りゅう弾がお守り、”死”が癒しといった沖縄戦での出来事」は、関係する人々の生の声に接する中で出会う衝撃的な事態であり、「自分だったらと重ねて考えてみました」と想像力を動員して向き合う体験ともなっている。

基地問題でも、「本島の人には知られないところで深刻な問題が起きているということ自分の目を見て（中略）現状に危機感を感じた」、「米軍基地が日本の領土に普通に存在していることに違和感を感じた」など、問題意識が生まれる様子が見て取れる。

5) 仮説5の「ツアーへの参加により、沖縄への親近性が増加するであろう」という予測は支持されたといえるだろう。

例えば、原文の中で「沖縄の学生には熱いものを感じた」「すごく刺激を受けることができた」「心から学び想いを込めて話をしてくれているふうに見えました」「平和発信」の想いの強さを感じた」といった「人」に関わる記述や、訪沖2回目の4年生が「去年より沖縄を好きになっています」という沖縄のイメージ全体に関わる記述にも象徴されていると言えよう。

親近性の増大の重要な要因として、参加学生が現地の様々な人々と交流したことが挙げられるだろう。それはまず、沖縄でガイドを行っている大学生たちとの同世代同士の交流である。次には沖縄戦の証言者たちとの真摯でかつ人間的な交流である。さらには、うたごえペンション「まーみなー」で三線や沖縄音楽をとおして交流した経験である。これらの交流により参加者たちは、沖縄の人々と固有名詞のつきあいを通して親近性が大いに増加したといえる。これらのことは、同時に、仮説6の検証でもある。

6) 仮説6では「ツアーへの参加により、沖縄の人々とのつながりをより意識するようになるであろう」と予測したが、これも支持されたと言える。

それは例えば、「今回の沖縄の学生との出会いは、なんとなくあれだけでは終わらない気がする」「こんな風に輪が広がった」「大切な仲間がいる場所」といった記述に象徴される。また、「同じ人間であり、同じようなことを考えている」と対等性や共感を意識することによって、「沖縄人などと呼ぶ人もいることに憤りを覚え」たりもするようになっている。

前項でも述べた固有名詞の認識や具体的個人を通じた戦争認識が体験的・交流的に取得されることにより人とのむすびつきが強く深くなることは、毎回の沖縄ピースツアーの目的であり、今回も同様である。これはすでに述べたように、証言者との対話、学生同士の交流、宿のスタッフとの楽しい時間、の3つをとおして沖縄の人々との出会いと交流を通じたつながりが深められた結果と考えられる。

7) 仮説7は「ツアーへの参加により、平和のロールモデルが見いだされるであろう」という予測であるが、これも支持されたと言えるだろう。

原文を見ると、とりわけ学生ガイドについては、「自分と同年代の人たちがやっているこ

とが純粹にすごいと感じた」だけでなく、「生き方、考え方、接し方、見習うところが多く」「解説の仕方、研究熱心さを学びたい」「この訴える・伝える力を自分達も勉強しなければならない」「話し方一つとっても惹き付けるものがあり」「とても嫉妬したし、私の目指すべきところである」等と多くの参加者が記述している。

8) 仮説8では「ツアーへの参加により、平和の問題・沖縄の問題に関わっていこうとする主体性やモチベーションが高められるであろう」と予測したが、これも支持されたと言える。

現地学習の際、「仮に当時私が同じ状況におかれていたら」「私もこの時代を生きていたら」「自分だったらと重ねて考えてみました」というように自分に引きつけた積極的・主体的な学習態度が見られた。また、将来に関わっても「今回体験したことを踏まえ、伝えていく事がとても重要な使命」「これから教師になり、子どもたちに”平和とは何か”をどう伝えていけばいいのか」「もっと戦争について知識をつけ、自分が教員になった時に子どもたちの心に響く戦争の学習をしていけるようになりたい」「伝えていくのが、沖縄の地で学び、考えてきた私たちに出来る事」「今後も何とか機会を作り沖縄の学習をしたい」他方、基地問題についても「今一番に考えなければ将来もう二度と取り返しのつかない、つまり基地が沖縄から無くなることのない状況が生まれてきてしまうかもしれない」という切迫感を伴って考えようとしている。

以上から、8つの作業仮説は概ね支持されたと言うことができる。ただ、仮説1については、抽象から具体へという変化のみならず、具体から一般化（抽象）という側面の変化も存在することが示唆され、認識の変化のプロセスをより詳細に検証する課題が残された。

これらにより、本ツアーにおける獲得目標の（1）実感を持って自らに引きつけて問題を受け止め、（2）新たな問題・新たな課題を発見し、（3）沖縄や平和の問題に関わり続けようというモチベーションが高められ、自らの次の活動がエンカレッジされるという諸点は、全体的として達成されたと言える。

（2）総合的考察

岡本(1993)は、平和学において「現場で」あるいは「現場から」学ぶ現場主義が重要である理由について、大学で学んだ理論を机上の空論に終わらせないためばかりでなく、①知識が体験によって裏打ちされること、②全体の中での知識の位置が確認され、他の諸問題と関係づけられること、その結果、③知識に方向性が与えられることによって、より深い、有効な知識となることを目指しているからであると指摘した。そして「限りなく理論と実践の統一を求める平和学の方法論」であると述べて「エクスポージャー」と呼ばれる現場研修を提唱した。岡本は、従来の社会調査を「主体→客体」という一方的な関係の下に、調査対象を研究者の理論的枠組に合わせようとするものと性格付ける。それに対し、「ある状況の中へ身をさらし、相手の世界観の中へ自分をさらけ出す」エクスポージャーという方法が「両者が共に主体として教え合い、学び合うという相互的な関係」の下で、

「相手もまた本当の自分をさらけ出し、エクスポーズしてくれるという相互関係でもあり、ここに本当の親愛関係が生まれる」として、この学習方法のプロセスは、状況から学び、相手から教えられる「学びの方法」であると共に「平和の実践」でもあることを指摘した。

本研究で紹介した沖縄ピースツアーはまさにこの「エクスポージャー」の体験であるといえる。事前学習での知識が、沖縄戦や基地の現場での体験で裏打ちされ、「相手の世界観」をくぐって、自分が学ぶ意味が実感されているように思われる。

沖縄の人々との関わりを、一方的な調査、一方的な学習にとどめず、「共に主体として教え合い、学び合う」相互的な関係のもとに「平和の実践」に変えていくことは、冒頭で述べたように、ゼミのピースツアーにおいて重視してきたものである。前述の結果・考察で述べたように、少なくとも学生ガイドとの関係については、共同でガイドプランを組み立てるワークショップを行い「現地の人と意見を出し合い学べた」ことにより「お互いが気がつく視点が違う」ことに気づきながら学び合う関係に近づいたのではないかと考えられる。今後、学び合いの関係を深める方法論の研究を、現地と共同で研究していきたい。さらに、沖縄戦の体験を受け継ぐ中での「学び合い」の方法論については、さらに多くの研究課題があると思われる。

次に、竹内（2009）は平和教育学の構築の試みの中で、戦後日本の平和教育を考察し、平和教育を受けた学習者の中に「三つの乖離」、すなわち、(1)過去の戦争と現在の戦争の乖離、(2)遠くの暴力と身近な暴力の乖離、(3)平和創造の理念と生の現実との乖離が存在すると指摘している。その原因として過去や遠くの暴力の問題を自分とつなげる「想像力」が養われない平和教育、暴力を阻止し、非暴力的方法に確信を持つ「創造力」が育まれない平和教育の問題点が挙げられている。これらの指摘を本研究と対応させると、本研究では、第一に、沖縄というフィールドワークにおいて過去の戦争が現在にも連続していることを学生が学んだこと、第二に、ともすれば本土で小さく扱われ知られることの難しいいわば遠くの沖縄がピースツアーを体験することにより身近になったこと、そして第三に沖縄に端的に現れている戦争体験の継承問題や軍事基地の不合理性を改善していく課題が自分の問題として内面化されたことが指摘できる。

竹内（2009）はまた、前者の「想像力」を育む方法として、戦争体験者と非体験者が水平的に向き合う「語り継ぐ」場の設定や、「もし自分が」という問いかけを「歴史の構造的理解」「歴史創造の主体性獲得」へとつなげていく歴史学習の方法、自然・歴史・文化と人間の営みのすばらしさに触れながら、それを破壊する戦争の残酷さをリアルに浮かび上がらせる現地学習などを提唱している。上述のように、本研究での参加学生たちは、「もし自分が」という自問自答をしながら現地の証言を受け止めようとしながら、また、自然・文化・人間の魅力に多面的に触れながら、このような過去の問題に対する「想像力」を成長させていったことが明らかにされたと言えよう。

後者の「創造力」を育む方法としては、法や民主主義・参加といった非暴力的方法によって暴力を平和へと転換できる確信を持てるような、政治教育、生活指導、特別活動の蓄積に着目している。この教育課題については、本ピースツアーの中では、教科書問題や基地問題に対する非暴力的抵抗を続ける人々の活動として接しているのであるが、その活動の意義をツアーの前後でどう発展させていくかは、今後の課題として残されている。

さらに、平和心理学の観点から、石原・伊藤(1997)、伊藤(1997)は、沖縄平和学習旅行および「日韓平和と交流のための体験学習旅行」に参加した学生の反応の変化を、事前・事後の質問紙を用いた PAC 分析等によって検証した。そこでは、現地において体験者の証言を聞くことや、学生との相互交流によって、国・地域・住民といった学習対象に関する抽象的・一面的・否定的イメージが具体的・総合的・肯定的イメージにシフトすることが見いだされた。この傾向は、沖縄を対象とする本研究でも確かめられた。

(3) 本研究の限界と意義

本研究の限界は、教育的課題を8つの仮説としてそれぞれが検証されたかどうかを事前事後のアンケートと事後の感想文をとおして明らかにする方法そのものにある。すなわち、学生の表現した文章が、そのまま学生の変化や心情を反映しているかどうかという問題である。すべての質問紙調査法の問題と同様に、社会的望ましさが混入する問題や、教師との関係性において教師からの期待に応えるなどのバイアスがかかっている点に注意すべきであろう。第二に、テキストマイニングによる量的把握を行ったが、参加人数の少なさの制約があった。これは効果的な体験学習のためには、少人数のメリットがあったことの裏側である。本研究での「仮説検証」ということをもっと強力に主張するためには、さらなる量的データによる検証が求められよう。第三に、小中高を含め他の沖縄平和学習の諸活動との共通性と差異性を追求することが今後の課題として残されたことである。

とはいえ、本研究では、沖縄というフィールドワークにおいて3つの獲得目標における8つの教育的課題(仮説)を提起し、それらが、事前事後のアンケートと事後感想文による表現された文章を対象としたテキストマイニングによる量的分析により、確認・検証された意義は大きい。

【謝辞】

データ入力を手伝ってくれた守下 理さんと武藤 瑛さん、校正に協力してくれた大高庸平さんに感謝する。

【文献】

- Adams D. (1986). The role of anger in the consciousness development of peace activists: Where physiology and history intersect. *International Journal of Psychophysiology*, 4(2), 157-164.
- Adams, D. (1995). *Psychology for peace activists: A new psychology for the generation who can abolish war* (Revised ed.) New Haven, CT: The Advocate Press.
- クレスウェル, J.W. (操華子, 森岡崇訳) 2007 『研究デザイン : 質的・量的・そしてミックス法』日本看護協会出版会.
- クレスウェル, J.W., V.L.プラノ・クラーク(大谷順子訳) 2010 『人間科学のための混合研究法 : 質的・量的のアプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房.
- 大東文化大学文学部教育学科演習問題委員会(編) 2010 『2011 年度向け 教育学科演習案内』大東文化大学文学部教育学科.

- 石原静子・伊藤武彦 1997 「体験学習旅行が学生に持つ体験の意味の実証的研究」『和光大学人間関係学部紀要』, 1, 89-98.
- 伊藤武彦 1997 「体験学習旅行の平和心理学『日韓平和と交流の旅』とその効果」古澤聡司・入谷敏男・伊藤武彦・杉田明宏『語りつぎ未来を拓く平和心理学』京都:法政出版, 149-178.
- いとうたけひこ・杉田明宏・井上孝代 2010 「コンフリクト転換を重視した平和教育とその評価——ガルトゥング平和理論を主軸にした教員免許更新講習」『トランセンド研究』8(1), 10-29
- 金 明哲 2009 『テキストデータの統計科学入門』岩波書店.
- 岡本三夫 1993 『平和学を創る—構想・歴史・課題—』平和図書 No.9 財団法人広島平和文化センター, 29-34.
- 杉田明宏 2001 「平和のロールモデル論」心理科学研究会(編)『平和を創る心理学:暴力の文化を克服する』ナカニシヤ出版, 116-130.
- 杉田明宏 2006 「沖縄・平和ガイドの平和心理学的考察」『心理科学』26(2), 30-47.
- 竹内久顕 2009 「平和教育をつくり直す」君島東彦(編)『平和学を学ぶ人のために』世界思想社, 36-53.
- UNESCO 1945 *Constitution of the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization*. United Nations.

【付録】

付録A: 2011 年度杉田ゼミ 募集要項

(*筆者注: 前年度秋に提示・説明・募集し、受講生を確定するための文書)

平和の学びを創る

一人ひとりの可能性を開花させる平和学習の理論と実践

杉 田 明 宏

虐待、体罰、偏差値競争、不登校、いじめ、自殺、差別、人権侵害、経済格差と貧困、飢餓、環境破壊、紛争・戦争——私たちの社会には、子どもたち（おとなも）一人ひとりの心身の可能性の開花を妨げるさまざまな力があふれています。このような力を平和学では「暴力」と呼びます。

暴力は、人を殴る・殺すといった直接的行為だけでなく、多くの人に「生きづらさ」をもたらす社会の仕組みや、それらを正当化する態度や価値観をも含めてとらえなければなりません。それら全体は「暴力の文化」と言い換えることもできます。

このゼミでは、「暴力の文化」と向き合い、私たち一人ひとりの可能性を開花させる「平和の文化」へと転換する学び方について体験的・理論的に考えていこうとしています。

ところで、教育学科において、なぜこのような学びが大切なのでしょう？

卒業生の多くは、学校・福祉・海外協力等の現場で人間発達の援助者になっています。どんな条件にある子どもでも（もちろん大人でも）、安心して学び、成長して行くことができる環境条件を創り出すことは、教育者・発達援助者の基本的使命といえます。それぞれの現場に存在する暴力に気づき、その状況をどのように変えていくことができるかを考え、行動する力が必要とされます。教育学科において、上述のような意味での「平和」に

ついて学ぶことは、その力を養うことになるでしょう。

逆に、こうした「暴力の文化」の存在に気づき、抵抗し変えていく観点と力を養っていないと、自分の主観の中ではどんなに「子どもたちのために」、「よかれと思って」、「いっしょうけんめいに」やっていると思ったとしても、結局は、困難に直面している子どもたちを救うことはできず、逆に追い詰めることに手を貸してしまっていた、ということになる危険性があると私は考えています。この危険性は、残念ながらますます高まっていると言わざるを得ません。

さて、このような目標を達成するために、ゼミでは、次のような学習活動に取り組んでいます。

(1) 前期は暴力と平和に関する基礎的な学習に取り組み、それを踏まえて後期は平和学習の教材やプログラムづくりにチャレンジします。それとともに、年度末ピースツアーの事前学習にも力を入れます。ゼミでは、年間を通じて大小のフィールドワークを重視しています。戦争遺跡・基地・資料館・体験者等の「平和資源」を活用し、多角的・総合的な体験型の学びを実施しています。毎年、新学期、夏休み等に、丸木美術館、埼玉県平和資料館、第五福竜丸展示館、東京大空襲戦災資料センター、松代大本営跡（長野）・無言館、ジョン・レノン・ミュージアム、横須賀米軍基地、千葉・館山戦争遺跡群等を訪れてきました。学習の総まとめとしてのピースツアーは、1996年度および1998～2010年度に沖縄、1997年度、2007年度（1年に2回実施した内の1回）は広島を目的地に選んできました。

**なお、フィールドワークとピースツアーは基本的に全員参加。そのため通常ゼミ時間以外の日程確保と実費負担が生じることを必ず考慮に入れてください。*

また、ゼミでの学習・研究成果を社会的に還元・発信・実践できる方法も研究・実践しています。これまで、「平和のための埼玉の戦争展」「埼玉ピースカレッジ」「板橋いのち・ふるさと・平和のつどい」、大東祭などに参加し、浦和や板橋の地域の方々とともに展示、発表、コンサート開催等に取り組んできました。このような大学の枠を越えた出会いから学ぶことも大切にしています。

最近では、平和学習のスキルを身につけることも重視して、ワークショップ型の授業方法を学習し、また、実際に自分たちで授業実践にチャレンジしています。09年度は大東一高にて、沖縄の基地問題をテーマとした模擬授業を実施させていただきました。

(2) こうした集団的学習研究活動と並行して、一人一人の研究テーマをゼミ論（必修）・卒論（選択）の形で追究します。テーマは基本的に自由ですが、ゼミでの学習と直接あるいは間接的に関係しているケースが大多数です。3年生のゼミ論を4年生の卒論に発展させる形が望ましいでしょう。

**最近の論文テーマ：「平和的な紛争解決スキル獲得への支援における一考察」「協同学習の成果と可能性に関する一考察」「若者の憲法意識に関する一考察」「中国・韓国の学校教科書におけるアジア太平洋戦争期記述の検討」「アーティストが伝える平和への願い」「メディアリテラシーの力をつける」「飢餓の構造と援助」「ブータンの幸福度」「戦争被害者のPTSD」etc.*

◆ 定員：最大で8人

付録 B：事前テスト

1 (2/13)南部戦跡フィールドワークで期待すること（感じたいこと・考えたいこと）
2 (2/14)座間味島フィールドワークで期待すること（感じたいこと・考えたいこと）
3 (2/15)米軍基地フィールドワークで期待すること（感じたいこと・考えたいこと）
4 (2/15)沖縄の学生との交流で期待すること（感じたいこと・考えたいこと）
5 (2/17)グループ活動で期待すること（感じたいこと・考えたいこと）
6 その他、全体を通じて期待すること（感じたいこと・考えたいこと）
7 沖縄は、いま自分にとってどのようなところだと思いますか？
8 杉田ゼミで沖縄に行った経験　今回で[]回目
9 過去に杉田ゼミ以外で沖縄に行った経験[]回→何年生時？[]
10 名前 11 年齢 （ ）歳 12 性別[男 女]

付録C：事後テスト

1 (2/13)南部戦跡フィールドワークで印象に残ったこと（感じたこと・考えたこと）		
2 (2/14)座間味島フィールドワークで印象に残ったこと（感じたこと・考えたこと）		
3 (2/15)米軍基地フィールドワークで印象に残ったこと（感じたこと・考えたこと）		
4 (2/15)沖縄の学生との交流で印象に残ったこと（感じたこと・考えたこと）		
5 (2/17)グループ活動で印象に残ったこと（感じたこと・考えたこと）		
6 その他、全体を通じて印象に残ったこと（感じたこと・考えたこと）		
7 沖縄は、いま、自分にとってどのようなところだと思いますか？		
8 今回の沖縄で出会った人で印象に残った人は誰ですか？お名前とその理由は？		
9 今回のツアーについて、こうしたかった、こうすれば良くなるという改善点は		
10 名前	11 年齢（ ）歳	12 性別[男 女]